

TRAVEL JOURNAL

Japan's No.1 Travel & Tourism Business Magazine
観光立国を支えるすべての人々に向けて

2013
8/5

クルーズトレイン 人気を読み解く

動くホテルが変えるシニアの旅



■誌上採録

海外旅行動向シンポジウムから

海外旅行マーケットの
現状と今後の展望

黒須宏志氏

(公益財団法人日本交通公社主席研究員)

■誌上セミナー

中国人客の購買パワー獲得術
「高級」の定義

好評連載 ■

視座

ドン・キホーテグループ

中村好明インバウンドプロジェクト責任者

SCRAP

クラブメッドのTOB受け入れ

高齢者大国の前線から
自然の理不尽さを知る

サイト見聞録

スクエア

NY発ツーリズムのヒント
賑わうニューヨーク港から

ビジネスパーソンの日々雑感
中野正博(新横浜ラーメン博物館課長)

高齢者大国の 前線から

vol.
005

文・篠塚恭一 (SPIあ・える俱楽部代表取締役)

自然の 理不尽さを知る

小 中学校の授業に「移動教室」という屋外活動がある。消防署や博物館、名産品をつくる工場などを訪問する社会科見学で、教室から飛び出し、五感を使って学んでみる。地方では漁師と地引網をしたり、農家に泊まって土に触れたりと、自然の中で大人の仕事を手伝う体験が都市の子供たちには新鮮に映るのだろう。

近年、統合教育が広がり、こうした授業に障がいをもつ子が参加するようになった。100人ほど生徒がいる学年では、身体の不自由な子が1人ぐらいはいて、周囲もできるだけ移動教室に参加させたいと考えている。この春は自治体や教育委員会の依頼で障がいをもつ子のケアを頼まれた。修学旅行でトラベルヘルパーを利用したいという旅行会社の相談も増えた。鎌倉や京都などメジャーな観光地では、移動に車いすを使う生徒など、特別なニーズのある子供や高齢な人や身体の不自由な人の受入体制が進んでいるが、民泊を行うような地方でバリアフリー対応が可能な施設は皆無に等しい。

先日、都心から車で2時間程の集落で農家民泊が盛んというので、役場に行って尋ねたが、そうした人たちの受け入れは全く想定していないという。農村の高齢化は都市部と比べて進んでいて、日本の販売農家は就労者の半数がすでに80歳を超えており、年金暮らしの超高齢者に食を委ねているのが現状だ。だから、家もバリアフリー化されていそうだが、こうしたお年寄りは元気に暮らしているの

で障がいをもつ子の民泊先にならない。

役場の観光係の関心は、専ら民泊可能な農家の数を増やし地域で100人の受入体制をつくることだ。宿泊環境が整えば都市の需要に合い、もっと多くの生徒が来てくれるようになる。ところが、農家側が1戸あたりの利用人数が減るのが心配で受け入れ先を増やすことに消極的という。しかも、こうした農家との交渉は農政係の担当だから話が通じにくい。これでは、その先に可能性が出てくる障がいをもつ子たちの学習機会は遠のくばかりだ。

不登校や引きこもりなど心の病は、都市だけで解決できる問題ではない。都市が教えてくれるのは、最少の努力で最大の成果を上げる便利な暮らしだろう。エネルギー技術ならそれもありだが、効率主義に偏重した生き方で人は元気になれない。

リハビリテーションの世界では、「バリアフリー」の環境をあえてつくることがある。普段の暮らしはバリアだらけなのが当たり前だからだ。ある種の不自由さを克服すること、むしろ最少の成果のためにも最大の努力を惜しまない生き方に人としての成長もある。以前、添乗で行った京都の薬師寺は、焼失してから400年になる金堂の再建費用を、当時の高田好胤管長が1人1000円の写経勧進で募った。大企業が大金を寄付してくれたら楽に済むものをあえて断り、一人ひとりの心を集めるために全国を行脚したと聞いて感動した。

自然は理不尽である。無駄にも見える。しかし、その理不尽さを知ることは、実は生きていくうえで最も合理的な学びだと思える。無駄の意味を都市が教えてくれることは少ない。

農村は今も後継者不足が続いている。これまでのような我関せずの姿勢では済まない。すそ野の広い観光は教育だけでなく、環境、健康とも密接にかかわるようになった。互いの課題を解決するには、さまざまなつながりが必要で、縦糸、横糸さらに斜めに人をつなぐこと、都市と農村をつなぐのはツーリズムの役割だと思う。



しのづか・きょういち 91年にSPIを設立し、現職就任。95年トラベルヘルパー（外出支援専門員）の養成開始、介護旅行事業に取り組む。06年NPO法人日本トラベルヘルパー協会を設立し理事長に就く。